

上伊那竜西地域における段丘の形成

正 木 智 幸 (自然科学類)

中部日本の後期更新世の研究にとって重要な意義をもつ、長野県上伊那郡竜西地域(天竜川右岸)に発達している河成段丘面をテフラと礫層によって区分し、その発達史を考察した。第1表は、本地域の最終氷期以降の編年をテフラ(信州ローム)の放射年代(小林ほか, 1971および, Shimizu, 1972, 町田・新井, 1979)を軸にして示したものである。古い filltop 段丘である大泉面がほとんど開析された後、最終氷期に谷を埋めて厚い礫層からなる filltop 段丘である神子柴面が形成され、その後小さな侵食期を挟んで薄い礫層からなる南殿面が形成された。その後河川は急速に下刻に転じ、低位段丘面群と新时期土流堆積面を形成しながら現在にいたったと考えられる。

神子柴礫層中の礫と現河床礫との特性の比較を天竜川支流の6河川について行くと、礫径はいず

れも段丘礫の方が小さく、また礫種分析(小黑川のみ)により運搬距離の長い花崗岩の大きな礫が段丘礫中では減少していること、さらに標高約2,000 m以上の流域を広くもつ3河川では段丘礫に円磨度の著しい低下がみられることなどがわかった。したがって神子柴面形成期には、大きな礫を遠方から運び得るような洪水の頻度の減少による河川流量の低下、および当時の森林限界以上での凍結破砕作用による岩屑生産の増大があったと考えられる。

文 献

- 小林国夫・小林武彦・清水英樹(1971): 竹原平一教授記念論文集, 191-218.
 町田 洋・新井房夫(1979): 地学雑誌, 88, 313-330.
 Shimizu, H (1972): Memoirs Fac. Scie., Kyoto Univ., Ser. Geol. and Min., 39, No. 1, 1-64.

